

氏名	原 将吾
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 10182 号
学位授与年月日	令和 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	シリア語における示差的目的語標示に関する実証的研究

主査	筑波大学 教授 Ph.D.	池田 潤
副査	筑波大学 教授 博士（学術）	秋山 学
副査	筑波大学 教授 博士（文学）	白山 利信
副査	筑波大学 准教授 文学博士	金 仁和
副査	筑波大学 准教授 Ph.D.	黄 賢暲

論文の要旨

シリア語は、アフロ・アジア語族セム語派に属するアラム語の変種のひとつである。4世紀頃から7世紀頃まで現在のトルコ東部からシリア、イラク北部に及ぶ広範な地域で話し言葉として用いられ、東西2つの方言に大別される。シリア語には、他動詞の直接目的語を標示する方法として、名詞に付加される従属部標示型標識 (I-) と動詞に付加される主要部標示型標識の2種類が存在する。これらの標識はそれぞれ出現する場合としない場合があるため、直接目的語の標示方法は①標識なし、②従属部標示のみ、③主要部標示のみ、④両方を標示という4通りに整理できる。このように目的語を示す標識が現れたり現れなかったりする現象は示差的目的語標示 (Differential Object Marking, 以下DOM) と呼ばれ、世界の言語に広く見られる。先行研究によると、DOMを持つ言語の多くで標識の出現には目的語の有生性や定性が関与しており、これらを両軸とする二次元的な階層で上位にある名詞句ほど標識を伴いやすく、下位のものほど伴いにくいことが知られる。

本論文は、通言語的なDOM研究の一例としてシリア語における目的語標示を実証的に記述することと、従属部標示型の狭義のDOMと主要部標示型のDifferential Object Agreementと呼ばれる現象の異同について新たな知見を得ることを目的とし、以下の6章によって構成される。

第1章 序論

第2章 先行研究

第3章 仮説の提案

第4章 仮説の検証①：西方言のDOM

第5章 仮説の検証②：東方言のDOM

第6章 結論と今後の課題

第1章で論文の目的と方法を明らかにし、全体の構成を提示した上で、第2章で先行研究を整理し、本研究の立ち位置を明らかにしている。先行研究として、まず世界の諸言語におけるDOMの様相とそれらに関する通言語的研究を概観し、次いでシリア語以外のセム系言語におけるDOMを俯瞰した上で、シリア語のDOMに関する従来の記述を概観している。これらの先行研究の成果と課題を踏ま

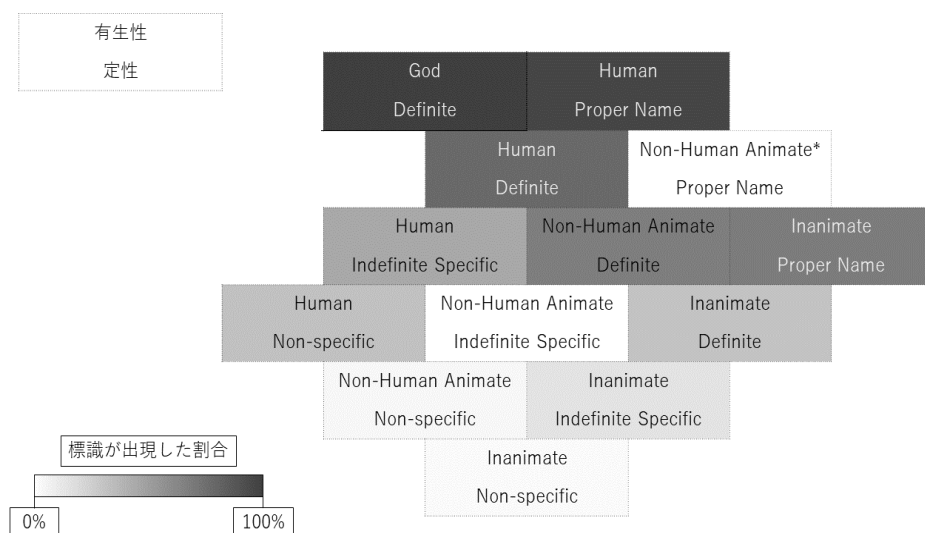
えて本論文の目的を確認するとともに、分析の要となる有生性・定性に関して本研究での定義を明示している。

第3章では、『偽ヨシュアの年代記』という西方言で書かれた散文資料に基づいて目的語標示がどのように用いられているかを実証的に明らかにしている。具体的には、従来の4分類を従属部標示型標識の有無と主要部標示型標識の有無に再編成した上で、それぞれの出現条件を検討している。その結果、前者については、有生性・定性の二次元階層で上位の目的語名詞句に対して標識が出現しやすく、下位になるにつれて出現率が低下するという仮説を提案している。後者については、主要部標示型の標識の出現に有生性が関与しないことを示し、従属部標示型標識と主要部標示型標識の有無は2つの異なる現象として捉えるべきであることを論証している。

続く第4章と第5章では、従属部標示型の標識に焦点を当てて、その出現と非出現が有生性・定性の二次元階層で説明できるという第3章の仮説が他の資料にも当てはまるかどうかを検証していく。第4章では、『偽ヨシュアの年代記』と同じ西方言で書かれた複数の資料を使用して、上述の仮説が西方言に一般化できるかどうかを検証している。用いた資料はエフェソスのヨハネによる『東方諸聖人伝』と、5世紀に生きた聖人の伝記『柱頭行者シメオン伝』の2点である。検証の結果、標識出現率には差異が見られるものの、「目的語名詞句が有生性・定性の階層で上位にあるほど標識が現れやすくなる」という仮説がこれらの資料にも当てはまることを統計的手法も援用して実証的に明らかにしている。これに基づき、第3章の仮説が西方言において一般化できることを主張している。

第5章では、東方言による資料を使用して、第3章の仮説が東方言にも当てはまるかを検証している。用いた資料は『カルカー・ド・ベート・スロークとその地の殉教者達の歴史』『祭司アイタイラーハーと助祭ハプサイの殉教』『司祭ヤアコーブと助祭アーザードの殉教』『匿名筆者によるササン朝末の年代記』の4点である。第4章と同様の分析により、これらの資料にも第3章で示した仮説が統計的にも当てはまることを示し、この仮説が東方言にも一般化できることを主張している。

第6章では、以上の議論で明らかになったことを総括し（下図）、「目的語名詞句が有生性・定性の階層で上位にあるほど標識が現れやすくなる」という仮説が本論文の対象とする4世紀から7世紀にかけてのシリア語の東西両方言に当てはまることを主張している。さらに、本論文がシリア語学と通言語的なDOM研究それぞれに対して与える貢献を示した上で、本論文で未解決の問題を示しながら、今後の課題と展望にも言及している。



審査の要旨

1 批評

セム祖語には格語尾があり、直接目的語は対格語尾によって標示された。格語尾を保持するセム語もあるが、格語尾が消失したセム語は直接目的語を標示する手段を独自に発達させた。シリア語は後者に該当するが、標識が付かない場合もあり、標識の出現条件は未解明である。本論文は、この未解明の問題に挑み、説得力に富む結論を導きだすことに成功している。

本論文の特色は、シリア語の文法研究に通言語的視点と統計的手法を取り入れた点にある。従来のシリア語研究では直接目的語標識の有無は主に定性との関連で論じられてきたが、この個別言語的現象を DOM という通言語的現象として捉え直すことにより、これまでのシリア語研究で見過ごされてきた有生性の関与が明らかとなっただけでなく、主要部標示型の標識の出現には有生性が関与しないことも究明している。これらの発見には、将来的にシリア語の文法書を書き換える可能性を秘めたインパクトがある。さらに、方言差、時代差、ジャンルを考慮に入れて入念にサンプリングした文書から数多くの事例を収集し、統計的手法も用いて有意差を検定することにより、発見の妥当性を実証的に論証した点も高く評価できる。

さらに、本論文には通言語的な DOM 研究に対する学術的貢献も認められる。まず、有生性と定性を両軸とする二次元的な階層で上位にある名詞句ほど標識を伴いやすく、下位のものほど伴いにくいとする先行研究の学説を新たなデータに基づいて補強したという貢献が挙げられる。また、シリア語の従属部標示型標識の有無と主要部標示型標識の有無とが2つの相異なる現象であることが明らかとなった結果、双方を持つ言語の中に新たな類型を立てる必要性が示唆されたことも一般言語学的に意義深い。

一方で、著者自身も認めているように、DOM という現象は名詞のみの問題ではなく、他動詞とその目的語となる名詞句との間の関係の示し方に関わる問題である。従って名詞に関わる特徴だけを考慮していても十分な記述とは言えない。特に動詞の意味や他動詞性に着目した分析を試みている点惜まれる。また、本論文では目的語となる名詞句の有生性・定性に焦点を当てたために、主要部標示型の標識の出現に有生性が関与しないことは究明できたが、主要部標示型の標識が出現する条件が何であるかは明らかにできていない。第6章で今後の課題として指摘するように、主題性を含む情報構造の観点も取り入れた分析が必要であろう。しかし、これらの課題は、いずれも本論文の成果をふまえて今後の発展的な研究を通じて解決していくべきものであって、本論文の学術的価値を損なうものではない。

2 最終試験

令和4年1月19日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。